

風景をモチーフとした油絵の研究

教科・領域教育専攻
芸術系（美術）コース
青木 成実

指導教員 西田 威汎

作品の要旨

I. 制作の動機

筆者の課題は形態を掴むのを得意とするかわり、発色や色彩感覚の荒さを克服することであった。その為に、大学院での制作は静物を主題に色味を重視した作品に取り組んだ。

ある時、鳴門の海があまりにも美しく思わずカメラのシャッターを切った。体の芯が打ち震えるようで、これだと直感した。まさに筆者の求めていたものに出会った瞬間である。今まで風景画に対して苦手意識があったが、実際に描いていくうちに太陽の放つ光のエネルギーに魅了されてしまっていた。太陽の光に反射してさまざまな表情を見せる雲や海の輝きは明暗を強調して描く筆者の作風にすごく合っていると思った。

また、私達は日常、海に囲まれて生活しており、自然と海に親しむ環境にいる。何処にいても自分の育った田舎の風景に思いをよせる人は多い。そういう意味からも取り組むテーマとして風景には筆者をひきつける大きな要因がある。中でも海には一層の魅力を感じる。筆者は自分の作品を通して多くの人々に語りかけたいと思っている。作品を見てくれる人々に何か一つでも心に響くものがあればと願っているのである。

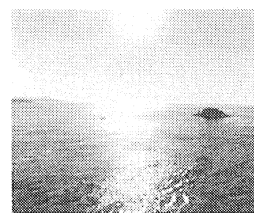
II. 修了制作への展開

修了作品『光～移りゆく時間～』シリーズ

は昨年（第84回国展（国画会主催・国立新美術館））に入選した『光』の改善版となる作品である。

「太陽の光によって生み出される美しい景色」というねらいは同じである。

前回の『光』では豪快な波に対して空の透き通った空間が遠くへ抜けていくような表現を出すためにペインティングナイフで均一な画面造りを試みたが、やはりまだ空から水平線にかけてのグラデーションに大きなムラを残してしまい、作品下部の水が揺れ動くダイナミックさを半減させる結果となってしまった。



「光」2010年

今回の修了制作はそれらの失敗を反省し、四作品ともすべて画面全体にあらかじめペインティングナイフで絵の具を施し、更にローラーで表面をなめらかにし、最後に刷毛で均一な面を作るという新たに二つの方法を取り入れた。その結果、ローラーの活用によりペインティングナイフの大きなムラを防ぎかつ水平線にかけてのグラデーションを滑らかにすることができた。更に刷毛を活用することによってローラーによってできてしまうギザギザする画面を平滑にすることができた。

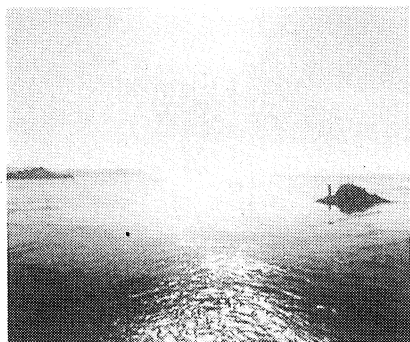
波の部分ではよりダイナミックさを出すためにここではローラーは使わず、ペインティ

ングナイフと刷毛を用いてムラを残すようにした。

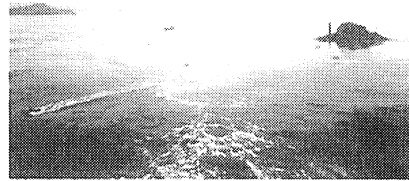
常に課題となっている発色についてはブルーにパーントシエンナ等、ブラウン系を少量加え、黄色さを出すことにより自然界に近い印象を与える発色を目指した。光の輝きにはインパクトをだすためにシルバーホワイトをメインに使用し、ブルーやグレーといったホワイト以外の色味を加えることで画面に深みがでるようにした。それに実際の光よりもコントラストを強く描くことで筆者の目指す鮮やかな風景になるように工夫した。

作品名『光～移りゆく時間～』の四作品は同じ日、同じ場所で時間をおいて撮影した風景を描いている。四枚を並べることで鑑賞者が海や雲の揺れ動く変化をより一層強く感じることができ、光のもたらす輝きをより鮮明に表わすことができると考えた。

四枚を並べて展示するにあたり、水平線の高さが四作品とも同じになるようにした。四枚のアングルを同じにすることによって、時間による光の移ろいを示したかったからである。また色調についても全体が繋がるように細心の注意を払った。一つ一つの作品が個々でも成り立つように細部まで描き込み、完成度を高めた。



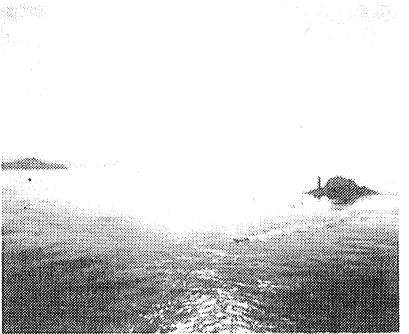
「光～移りゆく時間1～」162×194cm キャンバス・油絵



「光～移りゆく時間2～」162×194cm キャンバス・油絵



「光～移りゆく時間3～」162×194cm キャンバス・油絵



「光～移りゆく時間4～」162×194cm キャンバス・油絵

Ⅲ. 今後の制作における課題

現場で制作ができない場合は写真を使って制作をするが、写真を超えたりリズムの追及が大切だと考えている。その為には現場でのスケッチや作画を行ったり、写真による参考資料も大きく引き伸ばすという工夫が必要であろう。技術の向上と独自性を極めたい。